

国風文化が進んだ平安中期の和様の書を学ぶ

離洛帖 991年 藤原佐理 (944~998年) 筆 31.7×64.6cm

東京都島山記念館蔵

尾形 澄神

気を帯び気迫が押し寄せてくる。二行目頭の「動静」の二字が、臨場する中盤を予兆しているようで胸躍る。小野道風に憧れて育った佐理は、若い頃は道風に似た書き

「さり」の呼び名のほうがしつくりくるが、これは有職読み(書芸苑八六〇号二十九頁参照、正式には「すけまさ」である。

藤原家は名門だが、佐理は大化の改新で名高い藤原鎌足の末裔にあたる。父親は彼が幼少の頃に他界、祖父のもとで育った。佐理は出世が早かった。それは非凡なる書の才能を持っていたからで、三蹟と称される佐理の能書ぶりは羨望的であった。平安の世、貴族の教養と言えば一に読書、二に書芸である。書を能く(よく)する者は、それだけで尊ばれた。古書に「日本第一の御手」「手かきのすけまさ」と記されている。ところが筆を持たぬ時の評判は真逆。物臭、怠け者、呑みだくれ、と手厳しい。佐理は無類の酒好きだった。腕一本で出世街道を走っていた佐理だが、素行の悪さが仇となり四十過ぎてからは出世コースから次第に外れてゆく。そして四十七歳の時、大宰府の次官として転勤する。左遷ではなく自らの志願である。当時の大宰府次官は実質上のトップ、収入もはるかによかった。在京のままではこれ以上出世は望めないと考えたなら、選択肢としてはあり得る。また一説には、権力争いに嫌気がさしたとも言われる。

いざ、佐理は西へと旅立った。その途上、下関で立ち寄った宿で書いた書状が国宝となっている。冒頭に先ず佐理の草名(後の花押の原形)が書かれ「謹言離洛之後」とあることから離洛帖の名がついている。洛は京のこと、謹みてもうす、京を離れた後…云々と続く。宛先は甥の藤原誠信、内容は「摂政の藤原道隆殿にお別れの挨拶を忘れたから代わりにとりなしを頼む」というもの。いわゆる詫び状である。直接、殿下に手紙を書かなかったところを見ると、よほど罰が悪かったのか。彼の性格を垣間見るようで面白い。

謹みてもうす、と書き出しておきながら、その筆致は謹直さを遠ざけるかの如く冴えに冴え渡り、動と静を往き来するような変化の妙を尽くし、且つ強い骨

ぶりだったが、年齢とともに独自の用筆法を見出だしてゆく。

さて、離洛帖を書いた時の筆や紙、墨は宿から拝借したものと伝わる。そう言われて改めて彼の書蹟を一つひとつ見直してみると、離洛帖だけ特別に骨格が強く感じる。唸る筆触は遣い慣れない筆のせいかな？九州に四年余り滞在した佐理は、大宰府の官人と宇佐八幡宮の役人と乱闘騒ぎを起し、免職となり京へ召還される。五十四歳の時、流行した疱瘡に倒れ、還らぬ身となった。

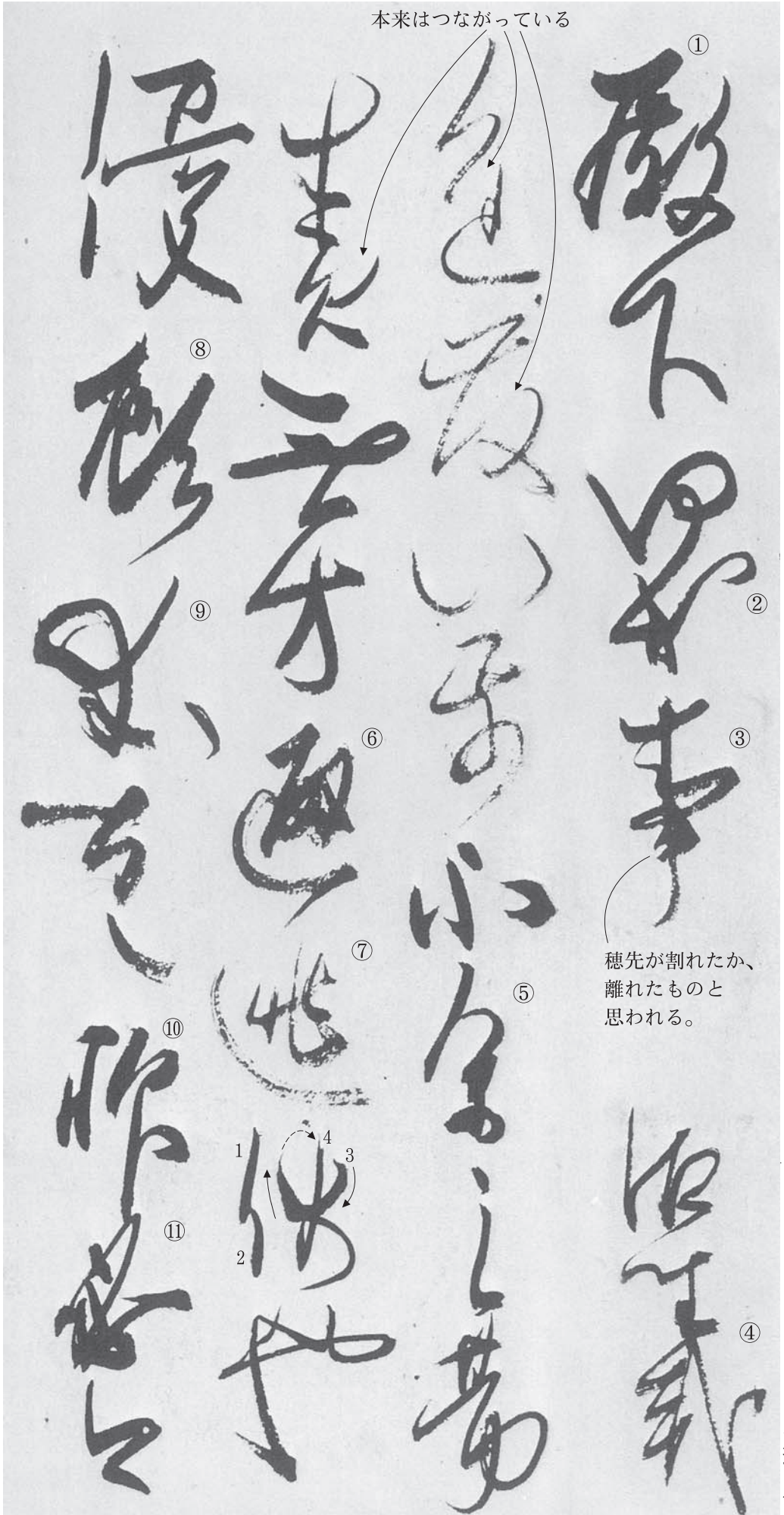
【補足1】離洛帖以外の佐理の真筆↓①詩懷紙…二十六歳に詩会で書いた漢詩。②恩命帖…始末書。③国申文帖…くにもうしぶみじょう、ともいう。三十九歳の時の詫び状。④去夏帖…陳情書。⑤頭弁帖…最晩年の書、不満を訴えた書状。

【補足2】三蹟とは…平安初期は、遣唐使を交流の橋渡しにし、唐の文化を積極的に吸収した。書においても晋唐書法を学び、三筆と呼ばれる空海、嵯峨天皇、橘逸勢のほか、最澄が能書として活躍した。平安中期になると遣唐使が廃止された後、唐も滅び、やがてわが国独自の文化を育む気風が生まれる。書にもそれが反映され、小野道風、藤原佐理、藤原行成が三筆とはひと味違う書風を展開し、その書蹟を三蹟と呼ぶ。また、平安初期の能書を「唐様の書」と言うのに対し、平安中期のそれを「和様の書」と呼ぶ。しかし三蹟の人も、王羲之をはじめとする中国の古典を礎としている。即ち、中国書法を学びつつ、日本人らしい感性で新しい書の創造を模索したのである。その先駆けとなったのが道風である。ただ、こと離洛帖に関しては、唐風の骨気を感じる。なお、中国書法の基本用筆は、仮名古筆にも生かされていることを付け加えておく。

離洛帖 (平安時代・藤原佐理筆)

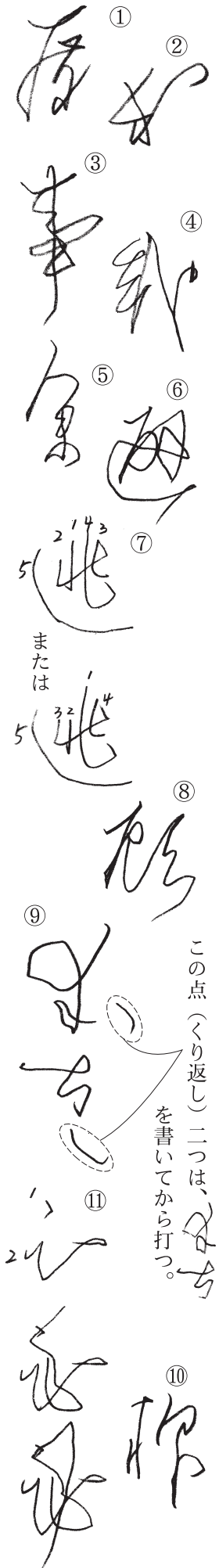
殿下何等事御座哉。進發以前不參之勤。責。無方避逃許也。優顧幸甚々々。抑(佐理)今

草名といい、草書体の署名。



本来はつながっている

穂先が割れたか、離れたものと思われる。

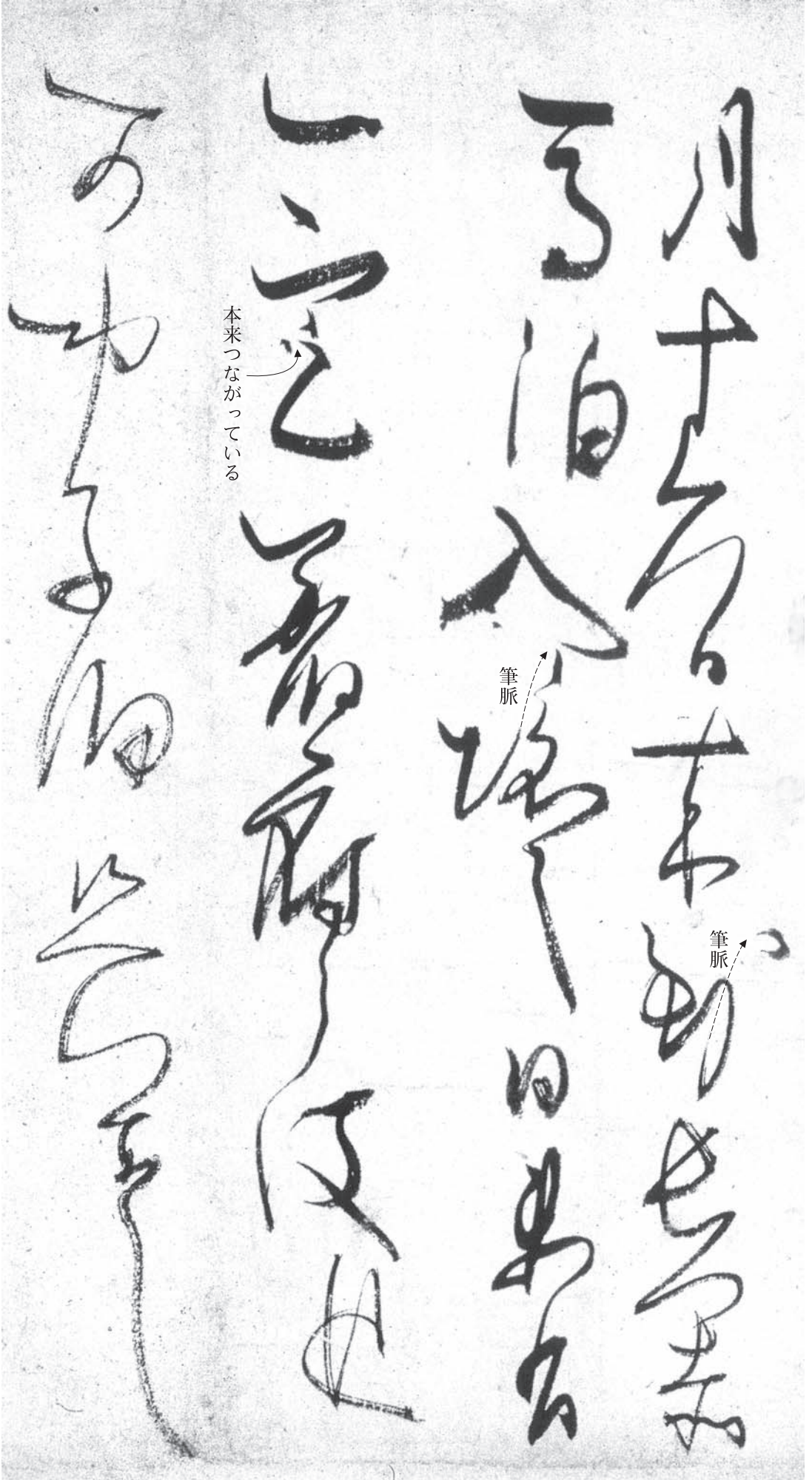


この点(くり返し)二つは、
を書いてから打つ。

または

離洛帖 (平安時代・藤原佐理筆)

月十六日。來到長門赤馬泊。入境之日。未有一定。着府之後。追可聞子細。恐惶頓首。



本来つながっている

筆脈

筆脈

東
海
河
東
東